

# 無制約者と知的直観（二）

——『テイマイオス註解』から『自我論』へ——

浅沼 光樹

ていることは明確に語られている。

## 六 物質の構成と直観の本質

「物質の構成」の問題が初めて扱われるのは、『考案』第二巻、第五章「直観および人間精神の本性に基く物質概念の第一起源 (Erster Ursprung des Begriffs der Materie aus der Natur der Anschauung und des menschlichen Geistes)」においてである。この箇所では「物質の構成」の問題は、確かに自然哲学的文脈において取り扱われている。言い換えると、力をめぐる当時の議論を出発点としている。にもかかわらず、「物質の構成」が同時に「直観の本質」の解明をも意味し

しかしわれわれは主張する、物質はわれわれの外部において現実的であり、われわれの外部において現実的である（たんにわれわれの諸概念においてあるのではなく）限りにおける物質そのものに引力と斥力が帰属する、と。

しかるに諸概念のあらゆる媒介なしに、われわれの自由のあらゆる意識なしに直接にわれわれに与えられるもの以外には、いかなるものもわれわれに対して現実的ではない。しかるにいかなるものも直観による以外には直接にわれわれに到達しない。それゆえ直観は

われわれの認識における最高のものである。直観そのもののうちに、それゆえ、何故に物質にかの諸力が必然的に帰属するのかという根拠がなければならぬであろう。われわれの外的直観の性状から、この直観の客観が物質として、換言すれば、引力と斥力の所産として直観されねばならない、ということが示されうるのでなければならぬであろう。それらはしたがって外的直観の可能性の諸制約であろうし、本来そこに、われわれがそれを考える際に伴う必然性は由来しているであろう。

これと共にわれわれは今や、直観とは何かという問いへと立ち戻る。「……」

こうして結局シェリングは「二つの相互に対立する活動を直観の可能性の必然的制約として」見出す。「直観の本質、直観を直観たらしめているものは、そこにおいて絶対的に対立する、交互にお互いを制限する二つの活動が統一されていることである」と言われる。<sup>(二)</sup>しかしこのようにして「直観とは何か」と問い、それに対して「二つの

相互に対立する活動を直観の可能性の必然的制約として」見出すというのは、一体いかなる権能に基いているのだろうか。この問いに答えるには、われわれは一旦『考案』を離れて、同年の『概観』に赴かなければならない。というのも、『概観』では「物質の構成」と同一の内容が時にくく同じ字句を用いながら、しかし『考案』の場合よりも一層広い視圈に立つて論じられているが、それに伴って『考案』では十分に指摘されていないものの「物質の構成」の理解にとっては不可欠と思われる幾つかの契機によりはつきりと光が当てられているからである。たとえば『概観』では、次のように語られている。

物質は、その二つの活動性の平衡において直観され、  
た精神に他ならない。<sup>(三)</sup>

『考案』では「物質の構成」が同時に「直観の本質」の解明であること、その場合の「直観の本質」とは絶対的に対立する二つの活動が統一されていることである、ということが示されていた。その対応箇所をこの引用に求めるな

らば、「その二つの活動性の平衡において」という句が内容的に後者をうけていることは明らかである。また「物質は「…」精神に他ならない」という句は、内容的に前者をうけながら、さらにそれを敷衍したものと見なすことができるといえる。この引用においては、「物質の構成」が同時に「直観の本質」の解明である、ということの含意が引き出されているからである。つまり「直観の本質」の解明が直観そのものの本質の解明であるためには、この解明に——なるほどカント的な意味における主観の枠をはみ出しているとしても——なんらかの意味における主観による超越論的な自己反省という意味がなければならないのである。ところでこの反省を遂行する超越論的主観は「精神」と呼ばれている。したがって「直観の本質」の解明とは、「物質の構成」としての——あるいは「物質の構成」という段階における——精神の超越論的自己省察の遂行を意味しているのである。——しかし問題は、引用における「直観された」という語句が何を意味しているか、ということである。

これによって示唆されているのは、「物質の構成」(「直

観の本質」の解明)が、したがって精神の超越論的自己省察が一つの直観によつて担われている、ということである。

しかしこの直観は、それが(感性的)直観の本質を解明すべきである以上、それ自身が再び感性的直観であるといふことはありえない。むしろそれはその定義からして非感性的直観でなければならない。その限りにおいて、なるほど「直観の本質」の解明は「物質の構成」という段階における精神の超越論的自己省察に他ならないとしても、しかしこの拡張された超越論的自己省察を支えているもの、あるいはむしろこの拡張された超越論的自己省察という場ないし圏域を初めて切り開くものはこの非感性的な自己直観でなければならないのである。

しかし「物質の構成」の段階においてはこのことは当の精神自身には自覚されていない。むしろ「物質の構成」とは、精神がこの非感性的直観において自己を認識しようとする最初の試みでしかない。したがって精神は「物質の構成」の段階にとどまることはできず、それは自己自身を求めて、自然の全領域を遍歴しながら一步一步自己の本質へと接近していくのである。

精神の全活動はそれゆえ、無限を有限において表現することを目指している。これらの全活動の目標は自己意識であり、これらの活動の歴史は自己意識の歴史に他ならない。

「…」人間精神の歴史は、それゆえ、それらを通してることによって人間精神が次第に自己自身の直観へ、純粹な自己意識へ到達する様々な状態の歴史に他ならないであろう。

「…」

「…」このようにして魂はそれ自身の所産によって、普通の目の持ち主には感じられないとしても、哲学者にとっては明白に、魂が次第に自己意識へと到達する道を描いているのである。「…」

「…」われわれは精神に付き添って表象から表象へ、所産から所産へと進み、最後には次のような地点へと到達するであろう。つまり、精神が初めてあらゆる所産から自己を解き放ち、その純粹な行いにおいて自己自身を捉え、今やもはやその絶対的な活動性における

自己自身以外には何ものも直観しない地点である。<sup>(四)</sup>

人間の精神は、それがあらゆる客観的なものを捨象することによって、この働きにおいて同時に、われわれが知的と呼ぶところの自己直観を持つ。<sup>(五)</sup>

以上、『考案』と『概観』において「物質の構成」の問題が実際にどのように扱われているかを比較的詳しく見てきた。これを再びクリングスの『註解』解釈と照合してみよう。

## 七 クリングスの『註解』解釈との照合(一)

その『註解』解釈においてクリングスは、シェリングの自然哲学における質料概念が『テイマイオス』の「受容者」に由来し、それを継承するものであると主張していた。ところがその際に彼は、本来ならば互いに区別されるべき二つの契機——これは『テイマイオス』における受容者の二

つの契機でもあるのだが——を明確に区別せずにシェリングの自然哲学における質料 (Materie) 概念に帰していた。二つの契機とは「神的ヌースに」対置される「永遠の、不可視の、神的ならざるゲノス」という契機と「世界の实在——根拠として考えねばならない規定や形式を欠くもの」という契機である。

しかし実際に「物質 (Materie) の構成」が論じられる場面に目を転じてみると、『註解』が定位していた『テイマイオス』の世界創造論と『純粹理性批判』の構成主義的認識論との構造的同一視という段階は、既に乗り越えられてしまい、シェリングの思惟は「われわれの認識の形式はわれわれ自身に由来し、その質料は外部からわれわれに与えられる」という構図それ自体の否認という新たな段階へと進んでいる。ところが第一の契機、つまり形式と質料の外的対立という契機はこの構図を基盤としているのだから、それが除去されてしまえば第一の契機もまた崩落してしまう。それゆえ、クリンクスがそう思い込んでいたように、この契機をシェリングの自然哲学における質料概念の構成要素と見なすことはできない。

これに対して第二の契機、つまり「世界の实在——根拠として考えねばならない規定や形式を欠くもの」という契機は、第一の契機と異なって、形式と質料の外的対立という構図には必ずしも依存していない。とは云え、眼目は後者の契機が保存されているか否かということにあるのではない。むしろ問題なのは、それにさらにクリンクスの『註解』解釈には見られなかった要素が纏綿している、という事態である。

まず第一に、クリンクスは『註解』の哲学的意義を直観の形式に入り込む以前の直観の多様という——『純粹理性批判』にとって未知の——主題の主題化に見るとともに、さらにそれを後年の自然哲学における「物質の構成」という課題に連関させて理解しようとしていた。詳しく云えば、この認識の原素材とも云うべきものを「物質 (Materie)」という概念で捉え、これによる形式受容のプロセスを叙述するのが「物質の構成」の課題であると語っていた。ところがシェリングの実際の叙述に照らしてみると、「物質の構成」はたんなる物質の構成というだけにとどまらず、さらに同時に直観そのものの本質の解明という意味を持っている

る。

確かにクリングスの云うように、物質 (Materia) と呼ばれるこの『純粹理性批判』にとって未知の主題は、カント的に言えば——悟性や統覚の方面ではなく——直観 (感性的直観) の方面に——しかも明確にその彼方に——求められている。その限りにおいて物質 (Materie) を主題とするために、カント的な認識主観 (広義の理性) はみずからの限界を超えてゆくように迫られていると言える。しかしそれはあくまでもカント的な認識主観にとつてということではない。言い換えると、カント的認識主観にとつては外部であるもの——超越しつつそれに対峙しているもの——がなおも、たとえもはやカント的とは呼べないにしても、とにかくなんらかの認識主観にとつては必ずしも外部ではないという可能性は残されている。ところが、物質の構成が同時に直観そのものの本質の解明であると言いうるためには、この可能性が現実のものになつていなければならぬ。というのも、後者の——もはやカント的とは呼べない——認識主観に既に立脚していなければ、物質の構成という課題の遂行が同時に直観の (それゆえ認識主観の本

質の解明を意味する、と言えるはずもないからである。

——ところが、「物質の構成」が同時に「直観の本質」の解明でもあるというまさにこの側面を、クリングスは彼の『註解』解釈において見落としている (あるいは故意に脱落させている)。——しかも彼が見落としているのはたんにこの側面だけというわけでもないのである。

『純粹理性批判』にとって未知の主題である、直観の形式に入り込む以前の直観の多様が主題とされるということは、カント的な認識主観にとつては、或る意味でその外部が主題とされることである。そうだとすると、既にその時点で——つまり、この事態がシェリングの云うように或る別の認識主観の立場への移行までも含意しているか否は別にしても——認識がこの外部にまで及びうるためには、カント的な意味における理性的認識 (すなわち感性的および悟性的な認識) 以外の認識手段が確保されていなければならぬ。というのも、さもなければカント的な認識主観を超えるべく云つても、それは内実を伴わない空言でしかないからである。ところがクリングスは、その『註解』解釈において、一方では「物質の構成」についてはきわめて熱心に語りな

がら、他方ではその遂行のために不可欠であるはずの別種の認識手段については触れていない。——あたかも『註解』における方法的考察の欠落が「物質の構成」に引き継がれでもしているかのよう。

しかしながら、仮にも『註解』においてシェリングが『テイマイオス』における方法的考察を黙殺しているのが事実であるとしても、実際の「物質の構成」においては方法的考察は欠落しているどころか、最重要主題の一つという扱いを受けている。というのもそこでは、経験の可能性の制約へ向けての超越論的反省を質料的原理それ自体にまで拡張するという意図のもとに——つまり、クリンクスがその『註解』解釈において示唆しながらも追求を断念していたまさにその方向性において——「知的直観」をめぐる考察が展開されているからである。要するに、プラトンが「受容者」を前にして方法的考察を導入せざるをえなかったように、「受容者」の対応物としての「物質」を前にしてシェリングも方法的考察を導入していると言えるのである。

## 八 クリンクスの『註解』解釈との照合(二)

このように実際の「物質の構成」には「直観の本質の解明」と「知的直観」という、クリンクスの『註解』解釈が指摘している以上の側面が認められるにもかかわらず、なぜクリンクスはこれを脱落させているのであろうか。

こうは考えられないであろうか。つまり、「物質の構成が同時に直観の本質の解明である」という側面の欠落という事態と「知的直観」という主題の欠落という事態とは相互に関連しあっている、言い換えると、この欠落はともにクリンクスが『テイマイオス』的構図を前提した上で、そこにシェリングの質料概念の本質的契機を見ていることに起因している、というようにである。仮にもしそういうことであれば、これら二つの側面は常に同時に欠落せざるをえず、両者を共に欠落させているという点に関してはクリンクスは首尾一貫しているということになる。というのも、神的ヌースに質料を、永遠の、不可視の、神的でないゲノ

スとして対置する」という構図を受け容れる、ということ  
は、『ディマイオス』の世界創造論と『純粹理性批判』の  
構成主義的認識論との構造的同一視という前提のもとで  
は、「われわれの認識の形式はわれわれ自身に由来し、そ  
の質料は外部からわれわれに与えられる」という意見に与  
することに他ならないからである。ところが、このとき「わ  
れわれ」が「ヌース」の側、要するに形式的原理の側に立  
っていることが暗黙のうちに前提されている。この前提が  
ある以上、形式的原理に外的に対峙している質料的原理の  
認識は、われわれにとっての他者の認識を意味せざるをえ  
ない。言い換えるところの前提のもとでは、質料的原理の認  
識が同時にわれわれ自身によるわれわれ自身の認識（自己認識）  
となるということはありえない。そうした可能性はいわば  
最初から排除されているのである。

しかし第二に、まさにそのために、言い換えると「世界  
の实在—根拠として考えなければならぬ規定や形式を欠  
いたもの」（概念的認識も知覚もされないもの）の認識がまさ  
にわれわれによるわれわれ自身の認識である、という側面  
が欠落したのために、クリングスの『註解』解釈において

は「知的直観」という主題もまた脱落せざるをえなかった  
ように思われる。というのも、既に見たようにシェリング  
の文脈では「知的直観」は、第一義的には精神の自己直観  
と解されているからである。

したがって、これら二つの側面をクリングスが脱落させ  
ているのは『ディマイオス』＝『純粹理性批判』的構図、  
つまり「われわれの認識の形式はわれわれ自身に由来し、  
その質料は外部からわれわれに与えられる」という構図に  
対する彼の態度と関係があるように思われる。この構図が  
前提されている限り、質料的原理の認識は精神にとって外  
的に対峙する他者の認識を意味し、精神による自己自身の  
認識とはなりえない。質料的原理の認識が同時に知的直観  
におけるわれわれ自身によるわれわれ自身の認識ともなり  
うるためには、この構図が否定され、「質料と形式がわれ  
われから初めて生成し、発生する」という見解に移行しな  
ければならない。——本来は「物質の構成」はこうした移  
行が果たされた上でなければ論じられないものであった。  
ところがクリングスの『註解』解釈は、『註解』と実際の  
「物質の構成」との間に生じているこのようなシェリング

自身の思惟の基本的立場の変化に追隨していない。——クリングスの『註解』解釈の問題点は他のどこかではなく、ここにこそ求められなければならなかったのではないだろうか。

## 九 クリングスの『註解』解釈の改訂

では、以上のような『註解』と「物質の構成」との間に生じている基本的構図の変化を考慮に入れ、それに追隨していたとするならば、クリングスの『註解』解釈はいったいどのように展開されるべきだったのであるうか。

まずはクリングスの当初の意図に立ち返ってみることにしよう。既に述べたように、クリングスとヘンリッヒは二人とも、若きシェリングによってカントの『純粹理性批判』の改造が企てられた際に『註解』がどのような役割を果たしたか、という点に関心を抱いていた。しかしヘンリッヒは、カテゴリー論に焦点を当てるといふ方策を採ったため、結果的に『註解』のなかでも『ディマイオス』に関する部

分ではなく『ピレボス』に関する部分が果たした役割を強調することになっていた。これに対して、クリングスは『純粹理性批判』の改造において『ディマイオス』そのものが果たした役割に着目するという方策を採り、『ディマイオス』の「受容者」がシェリングの自然哲学において「物質」として主題化される、という見通しを示した。

ところでこのような彼の洞察、つまり、『註解』で扱われていた「受容者」が後のシェリングの思惟のうちへ姿を変えて、つまり「物質」として登場してくるという洞察は、それ自体としては間違っていないと言える。しかしクリングスは、その場合の「物質」に二つの契機、つまり、わいわれに外的に対峙するものという契機と知覚も概念的把握もされないものという契機を帰属させていた。ところが、シェリングの云う「物質」は後者の契機を含むとしても前者の契機は含んでいない。したがって、「物質」がシェリングの云う意味での「物質」となるためには、前者の契機が取り除かれなければならない。しかもこの除去はたんなる除去ではなく、あくまでも『ディマイオス』Ⅱ『純粹理性批判』的構図の否定において、それと共になされね

ばならない。というのも、さもなければ「物質の構成」が同時に「知的直観」における「直観の本質」の解明とはならないからである。

さてこの事実、つまり「物質の構成」がシェリングの思惟において「直観の本質の解明」と「知的直観」という相を伴っているという事実が見定められるならば、それによってクリングスの『註解』解釈は、まず第一に、より欠点の少ないものとなりうると同時に、さらに第二に、より強力なもの——シェリングの初期思想の核心部にまで光を投げかけうるもの——ともなりうるように思われる。

まずはクリングスの『註解』解釈の補修とも云うべき第一の作業から始めるならば、「物質の構成」がシェリングの思惟において「直観の本質の解明」と「知的直観」という相を伴っているという事実が見定められることによって、第一に、クリングスの『註解』解釈に致命的打撃を与えていた『註解』における方法論的考察の欠落という事態に対して、その解決の方向性が示唆される。つまり、知覚も概念的把握も許さないものの認識という主題は、その認

識手段が確保されて初めて十全に取り扱うことが出来るにもかかわらず、クリングスは「物質の構成」が精神の自己認識であるという側面を容認しえないために、実際の「物質の構成」とは不可分な「知的直観」とそれをめぐる方法論的考察をもまた取り逃がす結果に陥っていた。しかるに、「物質の構成」が精神の自己認識であるという面を受け容れることで「知的直観」とそれをめぐる方法論的考察もこの解釈に統合されるが、これによってクリングスの解釈は『註解』における方法論的考察の欠落を解釈する際の導きの糸（「知的直観」）を手に入れる。つまり、これによって示唆されているのは、この方法論的考察の欠落という問題がたんに『註解』にとどまらず、それに先立つシェリングの初期遺稿をも視野に入れることによって、そこにおいて後になって「知的直観」と名前と呼ばれるようになる主題がいまだそのように呼ばれずに扱われていないかどうかを精査することによって、要するに、非感性的直観をめぐる当時のシェリングの問題意識に定位することによって、なんらかの解決が与えられるのではないか、ということなのである。クリングスの解釈は『註解』における方法論的考察

の欠落をきっかけとして迷走し始めていたが、もし仮にクリングスに最初からこのような展望があれば、そもそも彼の『註解』解釈もそのような混乱に陥らずにすんだかもしれない。

しかしさらに第二に、このような洞察によってクリングスの解釈は「物質の構成」のような特定の自然哲学的主題との結合から解放されるとともに、さらに自然哲学的主題との直接的結合からも解放される。というのも、既に見たように、「直観の本質の解明」と「知的直観」によって特徴づけられる問題圏は、必ずしも特定の自然哲学的主題に拘束される必要のない一般的なものであると同時に、さらに自然哲学的主題をそもそも成立させないし圏域にかかわるもの、その意味において自然哲学的主題一般よりも一層根源的なものだからである。しかしそうすると、このような一般化・根源化に伴って(就中、その根源化に伴って)、「受容者」がシェリングの思惟のうちへ登場する時期についても再考の余地が生まれる。要するにここには、一七九七年とされた「受容者」登場の時期を早めることができる可能性が浮上しているわけである。ところが、これによつ

てクリングスの解釈はもう一つの不備を免れることができる。すなわち、それは『註解』の影響を狭く自然哲学に限ることによって生ずる時間差の問題に関わるものである。

つまり、ヘンリッヒが『形式論』に対する『註解』の影響を指摘するとき、両著作の執筆時期は互いに接しているために影響発生の時間差の問題は生じない。これに対してクリングスの『註解』解釈に従うと、一七九四年の『註解』はようやく数年を経て『考案』や『概観』に影響を及ぼしていることになり、しかもそのような時間差が生じている理由は説明されない。フランツのような人であれば、そこにクリングスの『註解』解釈の難点(不自然さ)を見るであろう。ところがこの問題に関しても再考の可能性が示唆されるのである。

では、改訂されたクリングスの解釈に従った場合、「受容者」がシェリングの思惟のうちへ最初に登場するのは一体何時ということになるのだろうか。しかしこのように問うことによつてわれわれは、クリングスの『註解』解釈のたんなる補修作業を超えて積極的改造とも云うべき第二の作業にとりかかることになるが、これによつて同時に、わ

れわれの考察は、その真の意味を明らかにするであろう。

## 十 『註解』から『自我論』へ

われわれの考察が正しければ、「受容者」が最初に登場するのは「直観の本質の解明」と「知的直観」によって特徴づけられる問題圏の登場と同時になければならぬ。したがってその大体的見当を付けるために、仮に「知的直観」という徴表を用いるならば、この概念が初めて登場するのは『註解』執筆の一年後に書かれた『哲学の原理としての自我について』あるいは人間的知における無制約者について』（以下、『自我論』と略記）においてである。つまり、『自我論』においては「無制約者」としての絶対的自我的自己直観が「知的直観」として主題化されている。そこでまずは、「世界の実在―根拠として考えなければならぬ規定や形式を欠いたもの」である限りの「受容者」がシェリングの思惟の内へ最初に登場するのは『自我論』ではないか、という予想が立てられる。――しかしこの予想の当否を確

かめるには『註解』から『自我論』へと至るシェリングの思惟の歩みを辿り直してみる必要がある。

ただしその前に『註解』から『形式論』へと至るシェリングの思惟の展開を正確に把握しなければならない。そうすると『註解』と『形式論』の主題上の関連は或る意味においては一目瞭然であると云える。というのも、『哲学一般の形式の可能性について』という表題が既に示唆しているように、ここには――『註解』における原カテゴリー論から『形式論』における哲学の原形式へというような――哲学の形式的原理の探求という主題上の明らかな連続性が見出されるからである。しかしたんにこうした理解にとどまるならば『註解』と『形式論』の内容的連関を正確に捉えたとは言えない。それどころかこの点のみを強調することはむしろ正しい理解の妨げになるように思われる。なぜならば、『形式論』冒頭においてシェリングはこの著作における自分の企図が「哲学一般の可能性に関する全問題の解決」であること、さらに哲学の形式および内容の可能性の問題は、それらが個別的に扱われている限り最終的解決が与えられる見込みはないということを明言しているからで

ある。<sup>(6)</sup>だとすると『形式論』が哲学の形式の可能性に関する問題のみを扱っているなどということは有り得ない。つまり、『形式論』は哲学の形式および内容の可能性の問題を主として前者の側面から扱っていると見ても、それは後者の問題が完全に考慮の外に置かれているという意味ではないのである。実際『形式論』では、『自我論』を先取りするかのように、既に哲学の原内容について次のように言われている。

端的にそれ自体において無制約的な根本命題は、それ自体が無制約的である内容を持たなければならぬ。[∴]このことは、あの内容が根源的に端的に定立され、その定立されていることが自分以外の何物によっても規定されておらず、それゆえ自分自身を（絶対的原因性によって）定立するものである場合にのみ、可能である。<sup>(7)</sup>

ここで無制約的というのは無規定的という意味を合わせたこともつことを想起するならば、『註解』における没形式的

素材から『形式論』における哲学の原内容へというように、さらにもう一つの意味においても、すなわち、哲学の質料的原理の探求という意味においても『註解』と『形式論』には主題上の連関が見出されるのは明白である。しかし既に述べたように『形式論』ではいまだ「知的直観」は登場しない。この概念は、知の実在性という問題が前面に押しだされ、この哲学の原内容が無制約者としてそれ自体として主題化されることによって、すなわち『自我論』において初めて登場するのである。

『自我論』においては、冒頭で「われわれの知一般の究極的実在根拠 (Realgrund) の演繹」<sup>(10)</sup>が試みられ、この実在根拠が「無制約者」としての「絶対的自我」に他ならないことが確認された後、その本質が自由であると述べられる。しかし自由とは「それ自身によってのみ存在し、無限を包括する」<sup>(11)</sup>ものであり、「自由とは自我にとつては、絶対的な自己力 (Selbstmacht) によって自己自身の内にあらゆる実在性を無制約的に定立すること」<sup>(12)</sup>なのである。しかしこのような意味における自由としての絶対的自我は概念によっては捉えられず、ただ直観、しかも感性的ならざる直観、

知的直観によつてのみ把握されうる。つまり、絶対的自我は「自己を實在化する」<sup>(一三)</sup>が、それは「知的直観において自我が自身を絶対的實在性としてあらゆる時間の外で産出する」<sup>(一四)</sup>ということであり、その意味において「自我はそれゆゑそれ自身に対してたんなる自我として知的直観において規定されている」<sup>(一五)</sup>と言われるのである。

さてわれわれの予想は、「世界の實在―根拠として考えなければならぬ規定や形式を欠いたもの」である限りの「受容者」が、シェリングの思惟の内へ最初に登場するのは『自我論』ではないか、というものであった。これに対しては肯定的に答えてもよいのではないか。しかしわれわれの当初の考えでは、「受容者」が最初に登場するのは「直観の本質の解明」と「知的直観」によつて特徴づけられる問題圏の登場と同時になければならなかった。ところがここには「知的直観」だけで「直観の本質の解明」はいまだ登場していない。つまり、知的直観が感性的直観との関係において、その本質の解明として論じられている箇所は見出されない。もちろん注意深く見ると、知的直観の主題化

にともない、たとえば『自我論』の序文には、カント哲学に即して哲学の形式的原理について論じされる場合に、悟性概念ではなく直観形式を重視する傾向が見出されるようになる。さらに『自我論』に続いて書かれた『批判主義と独断論に関する哲学的書翰』(以下『書翰』と略)になると、知的直観の「模倣」としての「經驗的活動」について語られ、それを解明するものとして「完全な感性論(eine vollendete Aesthetik)」<sup>(一六)</sup>が要請されている。しかしこうした主題が「物質の構成」と「直観の本質」の解明として具体化されるには『考案』および『概観』を待たなければならないのである。

さてわれわれにとつて問題なのは、クリングスの『註解』解釈に従うと、一七九四年の『註解』はようやく数年を経て『考案』や『概観』に影響を及ぼしていることになり、しかもそのような時間差が生じている理由は説明されないということであった。しかしこれまでの考察を踏まえると、実際に両者の間にあるのは次のような事態と考えられる。つまり、一七九四年の『註解』は数年を経て突如として『考案』や『概観』に影響を及ぼしているのではなく、寧ろ一

且背景に退くように見えるが、持続的に影響を与えていて、それが次第に前面に現われてくるような、そうした過程として考えられる。つまり、たしかにプラトンに対する直接的な言及の登場は一七九七年を待たなければならぬとしても「プラトン化」ということを念頭に置いて考えると、ここで進行しているのがクリングスが主張しようとし、われわれが修正した「プラトン化」であることは間違いないのではないだろうか。

しかしそうするとむしろ問題となるのは、どうしてクリングスの云うプラトン化が一方では持続的に働いていながら、他方ではこのように一旦背景に退いてしまうように見えるのか、ということになるであろう。

## 十一 『自我論』における『エチカ』と『テイマイオス』

『形式論』から『自我論』への展開に伴い、主題もまた知の形式から知の実在性へと移行する。絶対的自我はいま

や、たんなる知の原形式の根拠であるのみならず、さらに知の実在性の究極根拠として、すなわち、無制約者として規定しなおされ、さらにはこの無制約者の（自己）認識のために「知的直観」が要請される。——以上の点を否定する者はいないであろう。しかしそうすると、当然問題となるのは、この同じ事態を『註解』を背景としてみる必要性はどこにあるのか、ということであろう。というのも、『自我論』においては、シェリング自身が冒頭で断っているように、その著作の全体を通じてスピノザの言及が頻繁になされているからであり、この著作に対するスピノザの『エチカ』の影響は否定すべくもないからである。この点を強調すると、「無制約者」にはスピノザの実体が、さらに「知的直観」には直観知が擬せられ、前者は後者の影響のもとでシェリングの思想へ導入された、ということになるであろう。一見すると、ここには何も問題はないように見える。だが、本当にそうだろうか。

まずは、これまでの考察を踏まえた場合、この同じ事態がどのように見えてくるか、一度反省してみよう。そうすると——従来は全く見過ごされてきた——重大な錯覚が潜

んでいることに気づかざるえない。われわれの考察の成果の一つに、『註解』と「物質の構成」の間には——そしてそれはより厳密に規定しようとするれば、『註解』と『形式論』および『自我論』との間ということになると思われるが——『ティマイオス』Ⅱ『純粹理性批判』的構図（われわれの認識の形式はわれわれ自身に由来し、その質料は外部からわれわれに与えられる）の否定という段階が挟み込まれている、という洞察がある。ところが、この洞察が教えているのは、質料的原理としての「受容者」が、このような基本的な構図の変更を待たずしては、言い換えると、われわれに外的に対峙する質料的原理という性格を失って形式的原理との同一性において捉えられない限り、要するに、スピノザの実体と重ね合わされるような仕方以外では、シェリングの思惟の内へ登場しえない、ということである。しかし、受容者（『ティマイオス』と実体（『エチカ』がシェリングの思惟のうちへ同時に現れざるをえないという必然性が捉えられていない場合、「無制約者」の背後にはせいぜいスピノザの「実体」が見られるだけで、さらにその奥にあるプラトンの「受容者」までを見て取ることはできない。

つまり、『自我論』においては「無制約者」と「知的直観」がスピノザの実体や直観知と重ね合わせて理解されている、というのは間違いではないとしても、それはたんに事態の表層にすぎず、この背後にはより古い層として「受容者」と「エイコス・ロゴス」が潜んでいるのであるが、それがまるごと見落とされてきたのである。

ところで、このようにより古い層が見出されることによって、シェリングの思惟の展開に飛躍を持ち込む必要がなくなる。実際、『自我論』におけるスピノザの影響を排他的に主張するとき、どうしてもシェリングの思惟の展開のうちの一つの飛躍を持ちこまざるをえない。というのも、『純粹理性批判』の改造という当時のシェリングの基本的なプランに従って理解しようとする場合、スピノザが『純粹理性批判』とどのように関係しているのか俄には了解しがたいからである。一方、『註解』においては『純粹理性批判』は『ティマイオス』と構造上の対応関係を持っているとされ、後者が前者を改造する際の重要な指針として働いている。『エチカ』が関わってくるのは、既にこの対応関係が確認されたその後のことである。つまり、この対応

関係が前提された上で、「われわれの認識の形式はわれわれ自身に由来し、その質料は外部からわれわれに与えられる」という構図が否定されるが、まさにこの否定において『エチカ』との接点が生ずるのである。しかしたんに後者のみが注目されるとき、『自我論』における「無制約者」と「知的直観」の出現は唐突なものと映らざるをえない。しかし実際には、シェリングの思惟の脈絡においては、「実体」とは「受容者」の、「直観知」とは「エイコス・ロゴス」の別形態であり、そのようなものとして哲学史（より厳密には、超越論的哲学の歴史）の内部に位置づけられており、カテゴリー論と並ぶ『純粹理性批判』解釈上の問題である「物自体」の問題の解決のために一定の指針を与えるものとして働いているのである。

それだけではない。もう一つ見過ごされてきたことがある。つまり、かの構図の否定の結果は形式的原理と質料的原理の同一性ではない。したがってこのような前史を踏まえていないと、この「同一性」がどのような意味における「同一性」であるのか、つまり「無制約者」がどのような内的構造を持っているのか、ということも一切分からない。

くなってしまうのである。

つまり、「われわれの認識の形式はわれわれ自身に由来し、その質料は外部からわれわれに与えられる」という構図が否定され、「質料と形式がわれわれから初めて生成し、発生する」という見解に移行するといっても、そこには曖昧さがある。というのも、そこで言われているのは、起点において「われわれ」は形式的原理の側にあり、終点において「われわれ」は形式的原理と質料的原理の同一性として捉えられている、ということにすぎないからである。しかし、『註解』という項を考慮に入れてこの否定の運動を眺めるならば、シェリングの思惟の脈絡においては、それはあくまでも、形式的原理の側にあるかのように見えた「われわれ」が実体を失い、これに代わって、直観の方面に求められる「われわれ」が一層根源的なものとして現われる、ということの意味しており、断じてその逆ではないのである。つまり、形式的原理の側にあるかのように見えた「われわれ」が直観の方面に求められる一層根源的な「われわれ」の影と化す、というただその仕方でのみかの構図は否定される。要するに、その場合の「われわれ」は、質料的

原理（ただしこれは今や形式的原理との同一性において捉えられているのであるが）と解されるべき何かであり、これがシェリングの言う「無制約者」としての絶対的自我なのである。

このようにわれわれの立場において初めて、『自我論』においては「無制約者」としての絶対的自我に「受容者」と「実体」が重ね合わされていること、そしてそのために一見スピノザの「実体」そのものであるかのように見える絶対的自我も今述べたような特殊な構造を持つものとなっていることを見出しうる。それにもかかわらず、なおも『自我論』に対するスピノザの影響を排他的に、つまり『テイマイオス』からの影響を捨象して主張するならば、このような理解を悉く喪失するだけではない。さらには、これまでの解釈が総じてそうであるように、『形式論』と『自我論』を一体的に捉えることが出来ない、つまり、両者の間にたんなる形式と内容の関係というレベルを超えた、それ以上の内面的な連関を打ち立てられない、ということになる。むしろ『自我論』におけるスピノザの影響に着目し、それを強調しようとすればするほど、『自我論』と『形式論』の懸隔は一層広がらざるをえない。なぜなら、一方で

『形式論』にはスピノザの痕跡は皆無であるのに、他方で『自我論』はスピノザの構想に対する肯定的な言及が頻繁に見出されるからである。

これに対してヘンリッヒと（修正された）クリングスの云う二重のプラトン化を背景として『形式論』と『自我論』が眺められるならば、二つの著作がともに『註解』に端を発し、二つに分岐しながらも一体性を保っていること、逆に一体性を保ちつつも質的な差異を有していることが説明される。つまり、まず第一に、両者の関係を二重のプラトン化という図式のもとで統一的に、密接な内面的連関において理解することができる。しかもその場合この両者は、『純粹理性批判』の改造という一般的課題を構成する下位の特殊の課題として、つまり、ヘンリッヒの解釈が『純粹理性批判』のカテゴリー論との関係において成立しているように、クリングスの解釈は、実際には『純粹理性批判』の物自体の解釈と関係において成立している（すなわち、不可知とされる物自体の正体が「受容者」であると、ただし例の構図を否定した上で考えられるのである）が、そのような仕方であらば、事柄の上から内面的に緊密に結合させられているのであ

る。

しかし、さらに第二に、クリングスの云うプラトン化を  
実際の「物質の構成」を視野に入れつつ、修正した意味に  
おいて理解する限り、両者が二重のプラトン化を意味して  
いながらも、どうしてスピノザが『自我論』には登場し、  
『形式論』では登場しないのかも、つまり同じく『註解』  
を起点としつつも、互いに異質とも見える二重の効果をシ  
ェリングの思惟へ及ぼしているのか、ということも説明さ  
れる。なぜならば、これらは互いに連関しつつも、そして  
最終的には「絶対的自我」へと収斂する問題でありながら  
も、カテゴリー論に関する前者の問題は、『純粹理性批判』  
Ⅱ『テイマイオス』的構造を或る程度は維持したままで展  
開できるのに対し、物自体の問題は、この構造そのものの  
否定（そして同じことを肯定的に言えばスピノザの同一性の思想  
の採択となるのであるが）を伴いながら、取り扱われなけれ  
ばならないからである。その限りにおいて、二つの著作の  
間には、劇的とも言える変化が生じているのである。

### 結語 初期シェリングの思惟の展開におけ る『註解』の意義

ここまで初期シェリングの思惟の展開における『註解』  
の意義について考察してきた。しかし『註解』というテキ  
ストの身分についてはいまだに議論がある。なかには初期  
シェリングの思惟の展開におけるこのテキストの意義を全  
く認めないという主張もないわけではない。いまここでそ  
のような議論に立ち入ることはできないが、そうした議論  
に直接に関わらなくても『註解』を視野に入れるか否かに  
よってシェリングの初期哲学に対する理解が変わってくる  
ということだけは間違いないのではないか、というのがわ  
れわれの結論である。というのも、『註解』を視野に入れ  
ることによって、シェリングが絶対的自我と呼ぶもの、さ  
らには知的直観と呼ぶものの正体が、はじめて実質を伴っ  
て理解されるからである。

シェリングの思索が体系という形態を採ったときに、そ

の基礎が「哲学の原理としての自我」、すなわち絶対的自我にあることは誰も否定できないであろう。しかし同時にこの絶対的自我と呼ばれるものがシェリング固有の意味において一体何であるのかはこれまで不明であったと言わざるをえない。しかしわれわれの考察が教えているのは、シェリングの体系構想の根底に『註解』が、したがって『テイマイオス』が横たわっているということ、さらには絶対的自我と知的直観はスピノザの実体と直観知をならびに遡って、あるいはそのさらなる古層として『テイマイオス』における「受容者」とエイコス・ロゴスを有しているということなのである。

したがって絶対的自我とは無制約者、言い換えると、『純粋理性批判』の意味における直観の方面に求められている質料的原理であり、プラトンのいう「受容者」なのである。この事態こそがシェリングの初期哲学における絶対的自我が備えている独自性（フィヒテのそれとのより根本的な相違）を説明するのではないか。さらには、ヘーゲルが或る時点でまではシェリングと同じ道を歩むように見えながら、結局は両者の懸隔が明らかにならざるを得なかったのも、この

辺りに遠因の一つがあるのでなかろうか。

(一)

## 註

- (一) Schelling, F. W. J. : *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling, Historisch-kritische Ausgabe*. Reihe I, Werke 5 (= AA I, 5). Hrsg. v. M. Duner, Stuttgart-Bad Cannstatt 1994, Philosophie der Natur S. 210.
- (二) Philosophie der Natur AA I, 5, S. 212 u. S. 215.
- (三) Schelling, F. W. J. : *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling, Historisch-kritische Ausgabe*. Reihe I, Werke 4 (= AA I, 4). Hrsg. von W. G. Jacobs u. W. Schiehe, Stuttgart-Bad Cannstatt 1988, Allgemeine Übersicht S. 108.
- (四) Allgemeine Übersicht AA I, 4, S. 109–110.
- (五) Allgemeine Übersicht AA I, 4, S. 147.
- (六) Vgl. Franz, Michael : *Schellings Tübinger Platon-Studien*. Göttingen 1996, S. 240–241.
- (七) Schelling, F. W. J. : *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling, Historisch-kritische Ausgabe*. Reihe I, Werke 1 (= AA I, 1). Hrsg. v. W. G. Jacobs, J. Janzten und W. Schiehe, Stuttgart-Bad Cannstatt 1976, Form der Philosophie S. 266–267.
- (八) Form der Philosophie AA I, 1, S. 266.
- (九) Form der Philosophie AA I, 1, S. 279.
- (一〇) Schelling, F. W. J. : *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling, Historisch-kritische Ausgabe*. Reihe I, Werke 2 (= AA I, 2). Hrsg. v. W. G. Jacobs, J. Janzten und W. Schiehe, Stuttgart-Bad Cannstatt 1980, Vom Ich als Prinzip S. 64.

- (111) Vom Ich als Prinzip AA I, 2. S. 106.
- (111) Ibid.
- (111) Vom Ich als Prinzip AA I, 2. S. 134.
- (1E) Ibid.
- (1F) Vom Ich als Prinzip AA I, 2. S. 106.
- (1K) Schelling, F. W. J. : *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling, Historisch-kritische Ausgabe*. Reihe I, Werke III. Hrsg. v. H. Buchner, W. G. Jacobs und A. Pieper, Stuttgart-Bad Cannstatt 1982, Philosophische Briefe S. 87.

# Das Unbedingte und die intellektuelle Anschauung

— Vom *Timaios-Kommentar* zur *Ichschrift* —

## Zweiter Teil

Kouki ASANUMA

In seinem Aufsatz »Der Weg des spekulativen Idealismus« (1986) hat Dieter Henrich eine in der Forschungsgeschichte zum ersten Mal erscheinende Interpretation von dem Schellingschen *Timaios-Kommentar* vorgelegt. Seine These ist folgende: Schellings Absicht in diesem Kommentar ist zu zeigen, dass Platons Rede von der Welterschöpfung in Wahrheit nichts anderes als die Kantische Konzeption der Erkenntnis intendiert. Diese Identifizierung bringt aber in die Organisation von Kants Kategorienlehre zugleich auch eine neue platonische Struktur. Diese nicht explizierte Verschiebung der Kategorieninterpretation erhebt sich zum ausdrücklichen Prinzip in der *Formschrift*. Der *Timaios-Kommentar* ist also inhaltlich mit der *Formschrift* verbunden und erklärt, warum die Kategorienlehre in dieser anders als in der Fichteschen *Begriffsschrift* organisiert ist, obwohl die *Formschrift* das Anliegen Fichtes teilt.

Im Jahre 1994 wurde die Erstedition des *Timaios-Kommentars* publiziert. Diese enthält auch eine interpretierende Studie von Hermann Krings mit dem Titel »Genesis und Materie - Zur Bedeutung der »Timaeus«-Handschrift für Schellings Naturphilosophie«. Wie schon dieser Titel suggeriert, ist die grundlegende Hypothese der Krings'schen Interpretation folgende: Der *Timaios-Kommentar* ist eine Art Vorläufer der späteren Naturphilosophie Schellings, insbesondere ihres Materiebegriffs. Diese Hypothese ist, obwohl Krings dies nicht so explizit sagt, zweifellos eine Antithese gegen die Interpretation Henrichs.

Michael Franz kritisiert aber in seinen *Schellings Tübinger Platon-Studien* (1996) diese Hypothese von Krings. Er behauptet, dass die naturphilosophische Auffassung des Textes im Ganzen, wie sie Krings einleite, deswegen zu einer einseitigen, und darum letztlich inadäquaten Interpretation führe, weil sie an einem anderen Hauptanliegen des Textes vorbeigehe und den Kontext auf die Naturphilosophie einenge. Obgleich ein doppeltes Interesse Schellings Denken in diesem Kommentar leite, so führt Franz weiter, sei das Thema, dem Schellings vorrangige Bemühung gilt, doch nicht das naturphilosophische, sondern das transzendentalphilosophische, also dasselbe wie in der *Formschrift*.

Aber Franz erklärt nicht, wie beide Themen in *Timaios-Kommentar* zusammenhängen. Diesen Zusammenhang aufzuklären ist die Aufgabe der vorliegenden Abhandlung. Diese hat zwei Teile. Im ersten Teil zeige ich, dass zwar für beide Interpretationen gleichermaßen gute Argumente im Text gefunden werden können, aber die Krings'sche Interpretation, zumindest in ihrer originalen Form, einige entscheidende Schwächen hat, also nicht überzeugend ist. Dann versuche ich im zweiten Teil, die Krings'sche Interpretation umzubilden, indem ich sie von der unmittelbaren Beziehung mit der Naturphilosophie freimache und neuerlich auf die

*Ichschrift*, insbesondere auf ihre Kerngedanken des Unbedingten sowie der intellektuellen Anschauung beziehe. Die vorliegende Abhandlung zielt nämlich darauf ab, den scheinbaren Gegensatz beider Interpretationen des *Timaios-Kommentars* aufzuheben und dadurch eine neue Perspektive auf Schellings frühere Philosophie zu eröffnen, indem sie den thematischen Zusammenhang des *Timaios-Kommentars* mit der *Ichschrift* klarmacht.